

倫理プリント

キリスト教の展開

パウロ/アウグスティヌス/トマス・アクィナス



(i) 原始キリスト教

■ イエスの死と復活

ローマに対する反逆者、神への冒涜として十字架刑に処せられたイエスは、復活の奇跡を起こす。
3日後、マリアが墓の様子を見に行くと、穴をふさいでいた巨岩が転がりイエスが外に出ていたという。
40日ほど地上にとどまり、弟子たちへ語り残したことを伝え、彼らを祝福しながら昇天したという。



やっぱりイエスは神の子だ。救世主に違いない！この教えをもっと広めていかなきゃ！



- ・ [1]]を中心に、イエスの教えを説く集団が作られる
- ・ 元々パリサイ派としてイエスの処刑に賛成した [2]]も、復活したイエスの声を聞く体験*をして、神中心の生き方へ [3]]した。 ※キリスト教の迫害に向かう途中雷に打たれ、「なぜ私を迫害する?」というイエスの声を聞いた



神ヤハウェより、神の子イエスを信仰する宗教としてキリスト教が誕生 ★救世主=ギリシア語でキリスト

■ 世界へ広まるキリスト教 (原始キリスト教)

ローマ=カトリック教会の最高指導者

④ [4]] (? ~ 67頃) : 十二使徒の一人で、ローマ帝国で伝道活動を行う。
皇帝ネロの迫害で殉教するが、初代 [5]] として名を遺した。
+α 彼の墓の上にはサン=ピエトロ大聖堂が建てられ、カトリックの総本山となっている

⑤ [5]] (? ~ 62頃) : パリサイ派の律法学者(イエスやその弟子たちの敵)
キリスト教が異邦人の間に広がっていく糸口となった人物

【パウロが深めた教え】 ① [6]] 思想 : 人類は、アダムとイブ(エヴァ)の「楽園追放」以来、
生まれながらの罪(=[7]])を背負っていた。

しかし、イエスが犠牲となってくれたおかげで、神から許されたんだ!!

- ② [8]] : 律法の遵守ではなく、信仰によってのみ、人は義(正しい人)とされる。
- ③ キリスト教の [9]] : [10]]・[11]]・[12]]の三つがキリスト教の基礎であり、最も大いなるものは愛である。

- イエス、パウロの教えによって成立~2世紀中頃までのキリスト教 = [13]]
これらの教えは、ユダヤ人以外へも伝道 → イスラエル民族による小さな宗教が世界宗教となる基礎を作った
- 信者による集まりが結成され、教会が誕生。特にローマ教会は「教会の中の教会」とされ、この教会の最高指導者は [14]] と呼ばれる存在に。
- キリスト教は迫害されながらも拡大し、313年に迫害終了の勅令を受ける。=正式な宗教としてローマ帝国から公認以後、[15]](教会の指導者)として名高い [16]] により教義が整えられる。

アウグスティヌス ■ 北アフリカ(354-430)

カトリック教義の確立者



- ・主 著 『告白』(自身の青年時代から回心に至るまでの記録)『神の国』(キリスト教的な歴史観を確立)
- ・元々マニ教の信者であったが回心し、キリスト教を研究。
- ・普遍的・世界的という意味を持つ^[17]]教義の確立に尽力。

イエスが「悔い改めれば、神の赦しによって救われる」と説いたのに対し、アウグスティヌスの感覚は「人間はもっと弱い存在で、悔い改めることもできないだろう…」というものであった。

↓ 神による救い、神の愛をさらに徹底した教えへと繋がる!

①^[18]] キリスト教における、神から人間に無償で与えられる愛や憐れみのこと。
人間に自由意志は無く、善い行いや反省する心は神が仕向けてくれているものに過ぎない。
罪へと陥る人間は、この恩寵によってのみ救われると説いた = **人間は神にすぎるしかない!**

②^[19]]と「地上の国」 プラトンのイデア論の影響を受け、人間の歴史を二世界の闘争と捉えた。
最終的には神の国が勝利し、歴史の終末には、それが世界規模で実現すると説いた。さらに、教会は地上に出現した神の国であると説いたことで、教会の権威確立をもたらす = **教会の言うことを聞け!**

③^[20]] 唯一神とイエスの双方を信仰するのはいかなるものか?という原始キリスト教での議論を終結させたもの
「父なる^[21]]」「子なる^[22]]」「^[23]]」の3つは聖書では別物だが、根本は同一
▲目に見えないが、人間一人ひとりに宿り、善良な行いへ導く存在

④キリスト教の^[24]] = 「信仰」「希望」「愛」 これはギリシャの四元徳より上位だ!!!

↓
まとめると、神からの愛でしか人類は救われぬ!あなたも神を愛しなさい!といったところ。
その後、キリスト教の教義の研究(神学)は発展し、中世にはアリストテレス哲学と結びつく。=^[25]]

人間が理性を持って考えようとする、どうしても神の存在が疑わしくなってしまう。どうしたらこれを解決できるか?という矛盾と向き合う中で、スコラ哲学が発展していった。11世紀のアンセルムスを祖として、13世紀に完成させたのが↓

トマス=アキナス ■ イタリア(1225?-74)

スコラ哲学の大成者



- ・主 著 『神学大全』(理性と信仰の関係性について述べた代表作)
- ・神学者として、キリスト教教義とアリストテレス哲学を結合。

自然の光が届く範囲 = 理性 (.....) で理解する ⇔ それを超えた範囲 = 信仰 (.....) で受け入れる

自然は神がつくったものであるから、必然的に「信仰>理性」という力関係となる

▲「哲学は神学の侍女(婢)」

人間は神に向かって進み、神を観想する生活に至福を得ると結論付け、合理的に考えることよりも、神の言葉を信ずる方が重視される「神」中心の世界観を展開

↓
人間性の束縛をもたらし、後にその反動としてルネサンス(文芸復興)や近代西洋哲学へ繋がることに

倫理プリント

キリスト教の展開

パウロ/アウグスティヌス/トマス・アキナス



(i) 原始キリスト教

■ イエスの死と復活

ローマに対する反逆者、神への冒涇として十字架刑に処せられたイエスは、復活の奇跡を起こす。

3日後、マリアが墓の様子を見に行くと、穴をふさいでいた巨岩が転がりイエスが外に出ていたという。

40日ほど地上にとどまり、弟子たちへ語り残したことを伝え、彼らを祝福しながら昇天したという。



やっぱりイエスは神の子だ。救世主に違いない！この教えをもっと広めていかなきゃ！

- ・ [1 **ペテロ**] を中心に、イエスの教えを説く集団が作られる
- ・ 元々パリサイ派としてイエスの処刑に賛成した [2 **パウロ**] も、復活したイエスの声を聞く体験*をして、神中心の生き方へ [3 **回心**] した。 ※キリスト教の迫害に向かう途中雷に打たれ、「なぜ私を迫害する?」というイエスの声を聞いた



神ヤハウェより、神の子イエスを信仰する宗教としてキリスト教が誕生 ★救世主=ギリシア語でキリスト

■ 世界へ広まるキリスト教 (原始キリスト教)



[4 **ペテロ**] (? ~67頃) : 十二使徒の一人で、ローマ帝国で伝道活動を行う。

皇帝ネロの迫害で殉教するが、初代 [5 **ローマ教皇**] として名を遺した。

[+α] 彼の墓の上にはサン=ピエトロ大聖堂が建てられ、カトリックの総本山となっている

ローマ=カトリック教会の最高指導者



[5 **パウロ**] (? ~62頃) : パリサイ派の律法学者(イエスやその弟子たちの敵)

キリスト教が異邦人の間に広がっていく糸口となった人物

【パウロが深めた教え】① [6 **贖罪**] 思想 : 人類は、アダムとイブ(エヴァ)の「楽園追放」以来、生まれながらの罪(=[7 **原罪**])を背負っていた。

しかし、イエスが犠牲となってくれたおかげで、神から許されたんだ!!

- ② [8 **信仰義認説**] : 律法の遵守ではなく、信仰によってのみ、人は義(正しい人)とされる。
- ③ キリスト教の [9 **三元徳**] : [10 **信仰**]・[11 **希望**]・[12 **愛**]の三つがキリスト教の基礎であり、最も大いなるものは愛である。

- イエス、パウロの教えによって成立~2世紀中頃までのキリスト教 = [13 **原始キリスト教**] これらの教えは、ユダヤ人以外へも伝道 → イスラエル民族による小さな宗教が世界宗教となる基礎を作った
- 信者による集まりが結成され、教会が誕生。特に**ローマ教会**は「教会の中の教会」とされ、この教会の最高指導者は [14 **教皇**] と呼ばれる存在に。
- キリスト教は迫害されながらも拡大し、313年に迫害終了の勅令を受ける。=正式な宗教としてローマ帝国から公認以後、[15 **教父**] (教会の指導者)として名高い [16 **アウグスティヌス**] により教義が整えられる。

アウグスティヌス ■ 北アフリカ(354-430)

カトリック教義の確立者



- ・主 著 『告白』(自身の青年時代から回心に至るまでの記録)『神の国』(キリスト教的な歴史観を確立)
- ・元々マニ教の信者であったが回心し、キリスト教を研究。
- ・普遍的・世界的という意味を持つ^[17] **カトリック** 教義の確立に尽力。

イエスが「悔い改めれば、神の赦しによって救われる」と説いたのに対し、アウグスティヌスの感覚は「人間はもっと弱い存在で、悔い改めることもできないだろう…」というものであった。

↓ 神による救い、神の愛をさらに徹底した教えへと繋がる!

①^[18] **恩寵**] キリスト教における、神から人間に無償で与えられる愛や憐れみのこと。
人間に自由意志は無く、善い行いや反省する心は神が仕向けてくれているものに過ぎない。
罪へと陥る人間は、この恩寵によってのみ救われると説いた = **人間は神にすぎるしかない!**

②^[19] **神の国**]と「地上の国」 プラトンのイデア論の影響を受け、人間の歴史を二世界の闘争と捉えた。
最終的には神の国が勝利し、歴史の終末には、それが世界規模で実現すると説いた。さらに、教会は地上に出現した神の国であると説いたことで、教会の権威確立をもたらす = **教会の言うことを聞け!**

③^[20] **三位一体説**] 唯一神とイエスの双方を信仰するのはいかなるものか?という原始キリスト教での議論を終結させたもの
「父なる^[21] **神**]」「子なる^[22] **イエス**]」「^[23] **聖霊**]」の3つは聖書では別物だが、根本は同一
▲目に見えないが、人間一人ひとりに宿り、善良な行いへ導く存在

④キリスト教の^[24] **三元徳**] = 「信仰」「希望」「愛」 これはギリシャの四元徳より上位だ!!!

↓
まとめると、神からの愛でしか人類は救われぬ!あなたも神を愛しなさい!といったところ。
その後、キリスト教の教義の研究(**神学**)は発展し、中世にはアリストテレス哲学と結びつく。=^[25] **スコラ哲学**]

人間が理性を持って考えようとする、どうしても神の存在が疑わしくなってしまう。どうしたらこれを解決できるか?という矛盾と向き合う中で、スコラ哲学が発展していった。11世紀のアンセルムスを祖として、13世紀に完成させたのが↓

トマス=アキナス ■ イタリア(1225?-74)

スコラ哲学の大成者



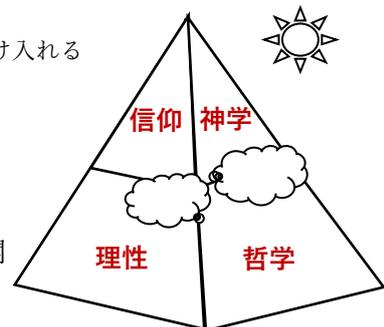
- ・主 著 『神学大全』(理性と信仰の関係性について述べた代表作)
- ・神学者として、キリスト教教義とアリストテレス哲学を結合。

自然の光が届く範囲 = 理性 (**哲学**) で理解する ↔ それを超えた範囲 = 信仰 (**神学**) で受け入れる

自然は神がつくったものであるから、必然的に「**信仰>理性**」という力関係となる

▲「**哲学は神学の侍女(婢)**」

人間は神に向かって進み、神を観想する生活に至福を得ると結論付け、合理的に考えることよりも、神の言葉を信ずる方が重視される「神」中心の世界観を展開



↓
人間性の束縛をもたらし、後にその反動としてルネサンス(文芸復興)や近代西洋哲学へ繋がることに